追悼の言葉、故武田和男様を偲んで

令和の新時代を迎えて間もなく５月31日、武田和男様の訃報を耳にしました。武田様とは、㈱坂田種苗の茅ヶ崎試験場にて13年間ペチュニアの育種に傾注いたしました。心より哀悼の意を込めて、追悼の言葉をお送りいたします。

故人は千葉大学卒業後約５年間、大分県別府市での県温泉熱利用研究所の新設に従事され、研究所長となられた宮沢文吾博士より花の育種の実務を学ぶことができました。博士が坂田種苗の顧問をされておられた関係もあり、博士の口利きもあって1957年に坂田種苗（現サカタのタネ）に入社。1966年筆者の入社時に前任者の跡を継いで坂田種苗の育種の花形部門であったペチュニア研究部の主任技師となられ、小生も武田チームの一員となり以降13年間、ご一緒にまさにペチュニア一筋の育種に従事させてもらいました。All-Doubleペチュニアで世界を圧巻し、会社を世界企業に育て上げた創業者坂田武雄が武田様に寄せた、素晴らしいペチュニアの育成によって事業を大きく発展させ、坂田の名をさらに増強させたい、との期待は想像を絶するものがありました。しかし時代は変わり、ペチュニアはすでに金の卵を生み出す花ではなくなり、PanAmerican社やGoldsmith社がしのぎを削って開発競争に注力しており、武田様はその競争に負けることなく、数多くの新品種を発表し「ペチュニアのサカタ」の伝統を守り続けました。中でも記憶に残したい２品種を書き留めておきたいと存じます。

武田オリジナル品種で世界の標準品種となり、自身の命名なる白覆輪 Picotee Series のうち緋色の白覆輪 Red Picotee は1983年に世界最高峰の花の品評会 All-America Selection（全米審査会）および Fleuro Select（全欧州審査会）にて、アメリカと欧州の同時受賞を果たすという金字塔を打ち立てた永遠の名品と言えます。

今一つの品種は、ペチュニアの泣き所である雨によるダメージに弱い点を克服し、雨後すぐに立ち直ってきれいな花を咲かせ続ける Recoverer Series の開発です。ペチュニア消費大国のアメリカで、1976年の開国200周年記念に沸き返る中、アメリカ最大の園芸会社であったBall社が、Recoverer シリーズの高品質を認め、アメリカ国旗の象徴である赤、青、白の３色を星条旗の愛称 Old Glory シリーズと改名して強力に販売をしたことが、思い出されます。全米の家庭や公園の花壇をこの愛国の息吹きとして栽植したことは忘れがたい武田様の見事な成果でもあったのです。また余談となりますが、三色のうちの Recoverer Scarlet

不朽の名花「レッドピコティー」

1985年　坂田種苗花の育種陣
右より２人目が武田様 右端は筆者

Red は、後々栄養系品種として一世を風靡したサフィニアの育成の交配親として、新しい発見になる野生種との交雑に一役買ったことは「知る人ぞのみ知る事実」であり、この事実は武田様もおそらくご存知なかったと思われます。ご自身の品種ではないものの世界を驚かせた、異業種の酒造会社の逸品の中に武田様の育種されたペチュニアの血が流れていたことは、まさに痛快なことと言えましょう。

その後サカタのタネを退社され、1992年ハワイで花ガーデンを経営され、帰国後は奥様と千葉県房総の老人ホームに移られ、冬にも水仙や菜の花が咲き乱れる温暖な気候のなか、心ゆく迄緑の濃い静かな楽園でお過ごしなされました。

お亡くなりになった翌日、奥様よりお電話を頂きましたが、奥様の「彼は本当に幸せな人生でした」の一言を耳にし、思い残すことなく遠い旅路につかれたことを、心密かに喜んでおります。研究熱心で真摯なお姿で新品種の育成に当たられ、また多くの人々への園芸の普及のために執筆された幾多の本も武田様の偉業を物語っていると考えます。

武田様、ごゆっくりお眠りください。彼の地に咲くという花をご覧になられて、まだ改良の余地があるなどとお考えになられたりせず．．．合掌

令和元年６月２１日

（元サカタのタネ専務取締役　須田　畯一郎）